

サウンドデザイン演習 （女子美術大学）

動画08

【概説】 ミニマル・ミュージックについて

～初期スティーブ・ライヒを手掛かりとして。

素材の反復によって「徐々に（※自然かつ必然的に）進展する音楽」。

非常勤講師：石井 拓洋

takuyo.lshii@gmail.com

2020（遠隔授業）

この動画で話すこと

1. ミニマル・ミュージックとは何か
2. ライヒにおけるミニマル・ミュージック
3. この授業での制作で目指す「ミニマル」
4. 代表的な藝術家 4人
5. 近代西洋藝術音楽以外からの多様な影響

1. ミニマル・ミュージックとは何か minimal music

概念の整理

※ 石井の考えをふくむ定義なので、各自、批判的に検討されたい。

1. ミニマル・ミュージックとは何か minimal music

概念の整理

※ 石井の考えをふくむ整理なので、各自、批判的に検討されたい。

- ・ 1960年代のアメリカ西海岸サンフランシスコ周辺に端を発する西洋現代音楽の一潮流。
- ・ 概念的先駆者は ラ・モンテ・ヤング。発展させたのは スティーブ・ライヒ。ほかの代表的存在としては、テリー・ライリー、フィリップ・グラス。ただし4者のスタイルは異なる。
- ・ 上記4者の広い時期について共通するスタイルは、旋律やリズムの点で単純な素材を用い、それを **反復して演奏する中で、作者が事前に想定しない、何らかの音楽的・藝術的效果が、〈おのずと現れること〉を期待する音楽**スタイル。緩急やクライマックスがないスタイル。
- ・ 演奏行為と音楽の生成過程が一体となった音楽を志向。ただし彼らは即興は認めない（たぶん即興行為の中に主体性をみて、それを批判してのことと思われる）。
- ・ およそ西欧近代合理主義に対する批判に基礎付けられた音楽であり、作曲家による意図的な趣向で論理的劇的構成を避ける（近代的な人間中心主義の批判、主体性批判）。

1. ミニマル・ミュージックとは何か

minimal music

補足

1. ミニマル・ミュージックとは何か minimal music

補足 1

- ・ ラ・モンテ・ヤング (1935-) が「概念上の父」とされる (松平頼暁、p.182)。
60年代初頭、米サンフランシスコの地で、**ヴェーベルン作品における反復、13Cまでのヨーロッパ中世音楽 (クライマックスの無い音楽として)、アジアの民族音楽、カウンターカルチャーなどの影響**から想起。
- ・ ヤング 《弦楽三重奏》 (The Trio for Strings, 1958, UCLAで作曲) がミニマル・ミュージックの端緒との説がある (小沼 p.21-22)。
- ・ 1960年代半ば頃のアメリカにはじまり、70年代にアメリカで隆盛し、80年代以降は全世界の多様な音楽文化に影響をあたえた。今日の商業的音楽にも大きな影響あり。

1. ミニマル・ミュージックとは何か minimal music

補足 2

- ・ ミニマル・ミュージックの名は、美術の同時期の運動「ミニマル・アート」(フランク・ステラ、ドナルド・ジャットなど)の比喻として名付けられたもの。ただし、スタイル上での具体的・直接的な関連はない(松平、同前)。※このように「関連なし」というのが、音楽家たちの一般的見解だが、しかし、反人間中心主義の側面から「フォーマリズム」としての共通点は容易に見出せる。
- ・ スティーブ・ライヒは、コンセプチュアルアートの美術家 ソル・ルウィット(1928-2007, 米)と親交が深い(篠田 2014)。この意味でミニマル・ミュージックは、コンセプチュアル・アートに近い。
- ・ ※ ミニマルといって、文字通りに何らかの「最小限」を志向する「要素還元主義」的動向ではないと思われる。なぜなら、演奏行為と音楽生成の一体化を理念とすることから、彼らの音楽活動から、聞こえる音の存在が減ったり、まして無くなったりする方向性は見出せないから。

2. ライヒにおけるミニマル・ミュージック

代表的作曲家としての スティーブ・ライヒ (1936 – 現在, 米)

2. ライヒにおけるミニマル・ミュージック

代表的作曲家としての スティーブ・ライヒ (1936 – 現在, 米)

- ・ ミニマル・ミュージックの代表的作曲家 スティーブ・ライヒ
Steve Reich (1936 – 現在, 米)
- ・ ライヒのエッセイ 「徐々に (※自然かつ必然的に) 進展する音楽」
(石井による意訳)1968年。 “ Music as a Gradual Process”
(直訳: 「穏やかに移りゆくプロセスとしての音楽」 近藤譲訳)
- ・ これはライヒの「ミニマリズムのマニフェスト」である
(篠田, p.345)
- ・ では、そこにどのようなことが書かれているのか？

2. ライヒにおける初期ミニマル・ミュージック

ライヒのエッセイ 「徐々に（自然かつ必然的に）進展する音楽」（1968）より

2. ライヒにおける初期ミニマル・ミュージック

ライヒのエッセイ「徐々に(※自然かつ必然的に)進展する音楽」(1968)より

(以下、石井が原文を要約して意識したもの。※印以下の部分は石井が補ったもの)

- 「(※ 私がここで述べたいのは)、文字通り、**徐々に(※自然で必然的な)進展をしていくような音楽作品についてだ**」(Reich, p.34)
- 「**徐々に 進展するものとしての音楽作品、それを演奏したり聞いた りする様子とは、たとえば、次に似ている。**
 - ・ ブランコを後ろに引き戻して手を離し、それが止まるまで見ている様子。
 - ・ 砂時計をひっくり返して、砂が落ちていく様子。
 - ・ 波打ちぎわに足を置き、波を見て、感じて、聞きながら、次第に足が砂に埋もれていく様子。」 (p.34)

(※ これらの様子は、そのキッカケ以外、全て**人の理知的で意図的な仕業ではなく、自然で必然性をもって緩やかに推移する現象であることに注意**)

2. ライヒにおける初期ミニマル・ミュージック

ライヒのエッセイ「徐々に（※自然かつ必然的に）進展する音楽」（1968）より

- ジョン・ケージもまた、人の意図によらず進展していく音楽を作った。しかし、そこで音楽的進展を決定していたのは易経（=東洋の占い）であった。そのため、進展する仕組みと実際に聞こえる音楽の進展には自然なつながりがない。つまり、音楽を進展させる仕組み、それ自体が曲を聴きながら認識できない。これはまた「12音技法」にも同じ問題が見出せる（p.35）。
- 一方、私（ライヒ）の興味は、作曲上での進展させる方法と実際に聞こえる音楽の進展とが、一体にして同一の事象であるような音楽だ（p.35）。
- 私（ライヒ）は、ケージのように、実際に聞こえてくる音とは無関係に存在する「隠された構造的装置」に基づいて書いたような曲には惹かれない（p.35）。
- ところで、人為的ではなく、理にかなった自然な形で音楽が進展していく仕組み、その仕組み自体を、私たちの誰もが、実際にはっきり聞くこともできる。それは、**曲の少し前の状態に基づいて、極めてゆっくりと音楽が進展していく場合だ**（p.35, ※ライヒの“*It's gonna rain*” 1965, にわかりやすい）。

2. ライヒにおける初期ミニマル・ミュージック

ライヒのエッセイ「徐々に（※自然かつ必然的に）進展する音楽」（1968）より

※ここまでの、ライヒが1968年当時に思っていたミニマルミュージックのあり方が示され、この後は、そのような音楽を聴く意義が示される。

- 「少しづつ自然かつ必然的な進展をする音楽」を聞くことは、耳をそのような音楽的〈真実〉(mysteries)にむかって開いていくことだ。それは実際に聞こえたことよりも、つねに遥かな広がりをもっているので、再び聞くことを誘うのだ (p.35)。
- この「徐々に（※自然かつ必然的に）進展する音楽」を演奏したり、聞いたりすることは、人を自由で、個人の次元を超えたある種の普遍的な儀式 (impersonal kind of ritual) へと誘い、音楽的なその進展に意識を集中することで、〈彼や彼女、あなたや私〉という次元からはなれ、かような「儀式」へと意識の場を転じることを可能とするのである (p.36)。

（ライヒのエッセイの要約と意識はここまで）

2. ライヒにおける初期ミニマル・ミュージック

整理 1

- ・ ライヒが最も関心があったのは、演奏行為と音楽の生成が、分離せず、一体であるような音楽をいかにつくるかであり、それを、その時点まで存在しなかった仕方で実現しようとする試みと読める。
- ・ “gradual process” (徐々になる過程) の語が示す真意は、文字通りの単なる「緩慢な変化」ではなく、ブランコや砂場の例や、即興への批判から、自然の摂理に従うほどに必然性のある変化の過程を指すことが読める (A)。
- ・ 上記(A) の実現のため、最初期のライヒは、2パートの音楽で実験した。ここでは短い同一の素材を両パートでループさせるが、片方のパートの再生速度が微妙に早く設定されているため、最初は両パートが重なっているが、再生していくに従って、両パートは必然的にズレていく。このズレが無為の効果を生む。『piano phase』1967、『come out』1966。

2. ライヒにおける初期ミニマル・ミュージック

整理 2

最初期のライヒによる、2パートj音楽での実験の概念図
『piano phase』1967、『come out』1966。



- ・ 2つの同一素材は、最初は重なって発音されていても、反復するうちに徐々にズれていく（最初のきっかけ以外、人為的ではなく、必然的な変化の過程が現れる）。
- ・ 「変化の仕組み」が聞いて解るとともに、その「変化による効果」もまた聞こえる（一体）。
- ・ ズレによる効果は、事前に作者が想定したものではなく、必然的に、おのずと現れるもの（万華鏡のような効果）。



- ・ 最初期のライヒによる、2パートのミニマルミュージック。エッセイの内容を実践した音楽。
- ・ 2つパートで奏される同一素材は、最初は重なって発音されるが、反復するうちに徐々にズれていく
- ・ 「変化の仕組み」が聞いていて解るとともに、その「変化による効果」もまた聞き取れる（一体）。
- ・ ズレによる効果は、事前に作者が想定したものではなく、必然的に、おのずと現れるもの

スティーブ・ライヒ『ピアノ・フェイズ』(1967) . アンヌ・テレサ・ドウ・ケースマイケルのダンス映像より、視聴約3分間。

Youtube “Fase - Anne Teresa De Keersmaecker & Michele Anne de Mey”, accessed : 2020-6-30, <https://youtu.be/RTke1tQztpQ>

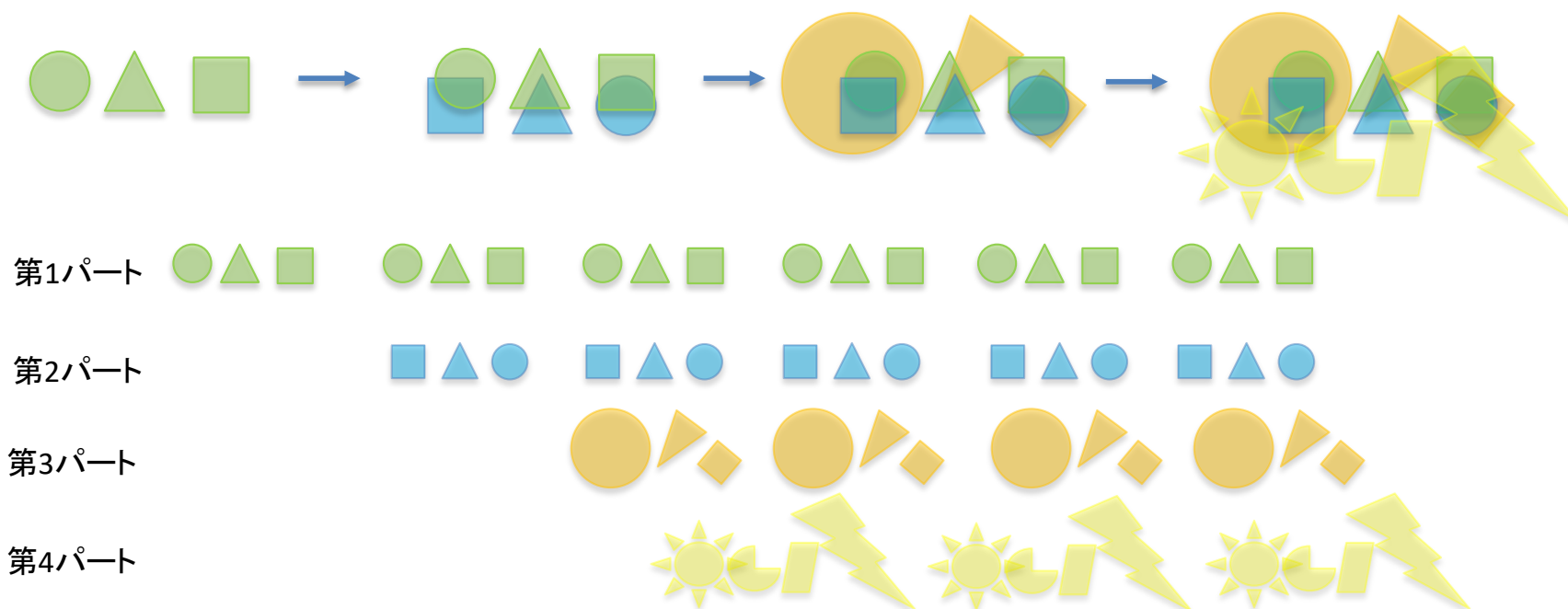
2. ライヒにおける初期ミニマル・ミュージック

整理 3

1970年代後半になると、ライヒは、多くのパートを用い、それぞれ異なる短く単純な素材を拍節において正しく反復して奏し(以前のようにズラさない)、それが次第に複雑に重なっていくことで、事前に想定できないような効果を徐々に進展させる試みの方向へと向かったように思える。同時にまた、聴感上の心地よさも意図的に追求している傾向があるように思う。

例：『大アンサンブルのための音楽』(1978)など

聴感上で、
音が重なる
概念図



- ・ 1970年代後半以降のライヒによる、大規模な編成を用いたミニマルミュージック。
- ・ 多くのパートで、それぞれ異なる短く単純な素材を、拍節的に正しく反復して奏する(以前のようにズラさない)。
- ・ それらが次第に複雑に重なっていくことで、事前に想定できないような効果を徐々に進展させる試み。

MUSIC FOR A LARGE ENSEMBLE
(1978)

STEVE REICH

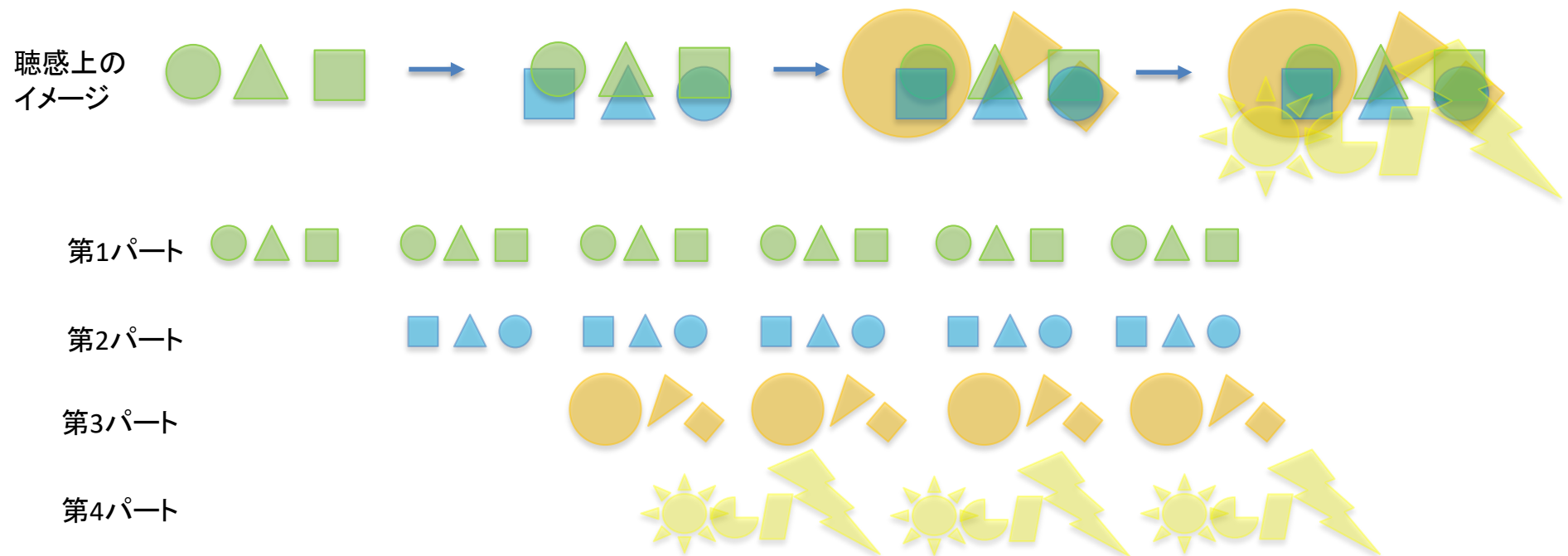
スティーブ・ライヒ『大アンサンブルのための音楽』(1978). (視聴は3分間ほど)

Youtube “Steve Reich / Music for a Large Ensemble (1978)”, accessed : 2020-6-30, <https://youtu.be/E0INXKMG7ss>

3. この授業での制作で目指す「ミニマル風」

3. この授業での制作で目指す「ミニマル風」

この授業で制作する音楽は、以下のような 70年代後半のライヒのスタイルを土台として、そこから、各自の感性に従って音の世界を展開していくことを期待している。その意味で、近代批判のコンセプトを必ずしも考慮していないので、ここでは常に「ミニマル・ミュージック〈風〉」という言い方をしています。



4. 代表的な藝術家 4人

※ 教材のページに音へのリンクあり

4. 代表的な藝術家 4人

※ 教材のページに音へのリンクあり

- ・ ラ・モンテ・ヤング (La Montte Young, 1935-)

「ミニマル・ミュージック」の「先駆」(小沼, p.29)。持続音 (ドローン) が特徴。

- ・ テリー・ライリー (Terry Riley, 1935-)

代表作：《A Rainbow In Curved Air》(1967)

- ・ スティーブ・ライヒ (Steve Reich, 1936-)

代表作：《ピアノ・フェイズ》, 《ドラミング》

- ・ フィリップ・グラス (Philip Glass, 1937-)

代表作：《浜辺のアインシュタイン》(1976) ※現代オペラ

5 . 近代西洋藝術音楽以外からの多様な影響

5．近代西洋藝術音楽以外からの多様な影響

- ・ ミニマル・ミュージックは、その性格から、近代西洋藝術音楽以外から多様な影響を受けている（非西欧圏の音楽、近代以前の西欧音楽、近代以後の西欧現代音楽、カウンターカルチャーなど）。
- ・ 影響の一つに、近代以前の西欧音楽、つまり「**中世音楽**」の影響も指摘されている。とくに、**レオナン、ペロタン**のノートルダム楽派。
 - ラ・モンテ・ヤング
中世音楽の「クライマックスと方向性がない音楽」としての影響
(松平頼暁, p.181)
 - スティーブ・ライヒ
『18人の音楽家のための音楽』(1976)における、和音の持続は、
ノートルダム学派の メリスマ・オルガヌムの定旋律の持続からの影響
(小沼純一, p.112, ただし注釈なし)

(講義3より) 単旋律から複旋律への道程

c. メリスマ・オルガヌム (12 世紀頃～) melisma organum の例

The image displays a musical score for a Melisma Organum, a type of medieval organum. It consists of three systems of staves. The top staff is labeled 'Duplum' and the bottom staff is labeled 'Tenor'. The first system is marked with a box containing the number '0' and the word '[Soloist]'. The Tenor part in the first system has the lyrics 'Al - le - lu -'. The second system is marked with a box containing the number '1'. The third system ends with the lyrics '- ia'. The Duplum part is a melismatic line, while the Tenor part consists of long, sustained notes.

オルガヌム声部 (対旋律) 上 (主役)

グレゴリオ聖歌 (定旋律, テノール) 下 (脇役)
引き伸ばされて「アレルヤ」と歌っている。

上の声部が動きが細やかで装飾的な対旋律。下のテノール声部は一音が長く引き伸ばされたグレゴリオ聖歌 (定旋律)。
Youtube Leonin Pascha Nostrum Organum Duplum Partitura Interpretación, accessed: 2020-6-23, <https://youtu.be/ngCRm7uLirA>

参考資料 ・ 自習のために

- Steve Reich “Music as gradual process”, Steve Reich, (ed.) Paul Hillier, *Writings on music, 1965-2000* (New York : Oxford University Press, 2002), pp.34-35. (※ スティーブ・ライヒの1968年のエッセイ 「穏やかに移りゆくプロセスとしての音楽」 の原著が収録された書籍)。
- スティーブ・ライヒ 「穏やかに移りゆくプロセスとしての音楽」 近藤譲訳、『エピステーメー』 1978年11月号収録。
- 松平頼暁 『現代音楽のパサージュ-20・5世紀の音楽_増補版』、1995年、青土社。
- 小沼純一 『ミニマル・ミュージック：その展開と思想』 1997年、青土社。
※ この書に収録された 「美術から音楽へ、そして文学」 (pp.246-268) は、美術とミニマル音楽を広く考える上で良い手掛かりとなる。
- 篠田大基 「ミニマル・ミュージックとコンセプチュアリズムの展開：スティーブ・ライヒとソル・ウィット、その先行作家たちとの比較を通じて」、雑誌 『哲学』 (第132号)、2014年、三田哲學會、343～366頁。(※ 本授業 「教材のページ」 にこの論文へのリンクあり)。

参考資料 ・ 自習のために

- ・ ウィム・メルテン 『アメリカンミニマル★ミュージック』 細川周平訳、1985年、冬樹社。
 - ・ フィリップ・グラス 『フィリップ・グラス自伝： 音楽のない言葉』 高橋智子訳、2016年、ヤマハミュージックメディア。
 - ・ マイケル・ナイマン 『実験音楽： ケージとその後』 椎名亮輔訳、1992年、水声社。
- ※ 2020年現在、国内のweb 上で読める辞書類には、ミニマルミュージックの適切な資料はほとんど見当たらない。つまり 「音の動きを最小限に抑え、、、」 を過大視し、モダニズムの還元主義的な性格を意識させ、ゆえに 「ミニマル」 と誘導する解説が多い。一方、ミニマル音楽は還元主義的ではないというのが本講義の立場であり、Wikipedia をはじめとするこの認識の枠組みにとどまると、しかし、ライヒらの本来の奥行きを取りこぼすことになるように思う。